

「大石順教尼の生涯 無いから出来る」

石川洋 著

大石順教尼は、17歳の時、堀江の妓楼の舞踊家（芸名妻吉）として、主人であり養父の中川万次郎に仕えていました。ある日、万次郎は芸妓のひとりの情痴に気が触れ、芸妓6人に狂刃を振るい、5人を殺傷。妻吉は、両腕を切断するも一命をとりとめます。被害者である妻吉は、養父を恨むどころか判事に、罪の軽減を請うのです。人としての心構えを教えられた養父に魔が差したとして、快癒してからはこの事件に一線を退きます。障がい者としての苦難に耐えながらも、心の障がい者にならぬと巡業芸人の道を選びます。このとき、小鳥は手は無くても子育てすることに啓示を受け、口で筆をくわえ字を書くことをはじめます。人生の転機は、名僧藤村叡運師との出会い。結婚し、2児の母になるが、尽くしても夫に迷惑をかけてしまう自身に限界を感じ、協議離婚します。この経験は、後に設立する「自覚庵」、日本初の身障者更正施設「自在会」の、入所者の自立の意識を育むという方針につながります。順教尼は弟子の育成に力を注ぎ、何事も実践を説いています。お弟子さんの体験談は、順教尼の温かくも厳しい思い出の場面を綴っています。福祉優先の社会が求められていますが、自立をテーマに健常者と障がい者の関わりを考えさせられました。

F・M・

^致知出版社^

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞